



■主な内容

- ・UIFA JAPON 災害復興見守りチームの活動報告
- ・保存と再生
 - －女性の協働組織・投資・実証的環境共生
化粧品工場から女性起業家センターへの再生
 - －保存技術と協働マネジメント術 求道学舎の場合
 - －屋敷町の町並み保存と活用 白壁アカデミアの活動
 - －民家の再生 先駆者中善寺紀子の成し遂げた再生の仕事
- ・団地再生シンポジウムから
- ・会員おすすめの本『「環境建築」読本』
- ・ライト建築アーカイブス日本設立記念イベント報告



ベルリン女性起業家センター キッズプレイスのある庭

UIFA JAPON 災害復興見守りチームの活動報告

安武敦子

災害復興見守りチームが、ここ数年の度重なる豪雨災害、内外の地震といった相次ぐ災害を受けて立ち上がったことは以前お伝えしました。現在、コアメンバーの4人で月に1回のペースで勉強会を行い、活動の基盤づくりをしています。災害復興見守りチームで実施している活動は、以下の4つです

- ① UIFA JAPON 連絡網の整備
- ② 被災体験の記録・災害の知恵の収集
- ③ 平常時の専門家としての啓発活動
- ④ 復興支援

①UIFA JAPON 連絡網の整備

ミニニュースや海外交流の会の際のアンケートで参加者を募り、現在11名が登録しています。UIFA JAPONの会員全員がメンバーになることを希望しています(募集は随時)。平常時は災害にまつわる情報をメールレターとブログでお知らせしています。

ブログ：http://blogs.yahoo.co.jp/saigai_uiifa/
メール：saigai_uiifa@yahoo.co.jp

災害時は、自治体や団体からボランティア要請があれば依頼を伝え、メンバーを組織します。被災した会員に対しては安否確認や支援の一つの網になりたいと考えています。

②被災体験の記録・災害の知恵の収集

震度5以上の地震が発生したときには、Ⅰ どのような場所で何をしていたのか、その時どのような行動をとったか、Ⅱ その時に感じた課題、Ⅲ その時浮かんだ提案、について継続的にアンケートを実施したいと考えています。第一回は7月23日に千葉県北部で発生した地震となりました。集まった数は17通でしたが、関心の高い人から寄せていただいたこともあり、とっさの行動や提案は示唆に富むものばかりでした。結果はミニニュースにて発表予定です。

③平常時の専門家としての啓発活動

講演会を年に一度程度企画すること、(財)東京都防災・建築まちづくりセンターの災害支援プラットフォームのメンバー

に参画すること(都内の震災模擬訓練に要請があればサポートする等)にしています。11月12日の講演会では、「仮設・日本村誕生をめぐる」と題し、トルコに移設された阪神・淡路大震災の仮設住宅の移設エピソードを拝聴しました。プレハブ仮設住宅のリサイクルの可能性や限界を考え、異なる風土での仮設住宅の根付き方を見て日本の災害復興時の仮設住宅の運営について検討を加えてゆくことが課題となりました。

④復興支援

中越地震の復興に関しては、日本都市計画家協会(NPO)が進めている中越プランニングエイド(以下「エイド」)に協力することにしました。エイドが選定した長岡市(旧小国町)の法末地区(51世帯)の復興支援案が求められています。そのなかで我々は法末の民家を記録し・伝える冊子づくりからはじめてはどうかと考えています。エイド全体では、交流スペースの開設やワークショップ、冬季交流などを含む「お泊りプロジェクト」を実施しながら方策を考えていく予定です。10月23日には交流スペース「法末むら・まちづくりセンター」の開所式を行い、以降、毎週メンバーの誰かが宿泊しています。新潟の農村で1泊して一緒になにか始めたい方、アイデアのある方はご一報ください。3年計画で進めていますので来春からの参加をお待ちしています。



写真左：法末地区の二階建ての中門のある母屋、
写真右：大橋麗子さんとチームのメンバー。

(大橋さんは都市との農業体験プログラムのなかで、廃校を利用した宿泊所の料理長をつとめてらっしゃいます。このときもたくさんのお芋をいただきました。翌週にはお料理を振る舞って頂いたとエイドのメンバーから聞いています。)

女性の協働組織・投資・実証的環境共生
—化粧品工場から女性起業家センターへの再生—

今年8月に行われた「海外交流の会：水の都市ベルリン」でライヒマンさんより紹介された「ヴァイバーヴィルトシャフト」は、会員の高い関心呼びました。このプロジェクトについて東京大会に参加していた、ベルリン在住のマリア・ウェッペンと、ウテ・ウエストロームに問い合わせたところ、「シンプルで論理的な」施設との賞賛のコメントとともに、写真が広報に送られてきました。



写真左：ベルリン女性起業家センターの魅力的な中庭
写真右：同上 屋根の太陽光発電パネル

■女性だけの協働組織・投資活動

ヴァイバーヴィルトシャフトは、女性が運営するドイツ最大のビジネスセンターです。女性達の一口103ユーロの出資金を原資として、会員1500人以上を集め、気長に役所と折衝し、公的基金を立ち上げ、銀行とのパートナーシップを積み重ねながら、女性の経済活動の支援拠点としました。女性が起業する際の経済的な裏付けを、長期レントの保証など優遇された条件でバックアップする業務などを展開しています。NL/No. 64にも掲載。

■数値目標化されたエコロジーの実践

ベルリン「ミッテ」のアンクラマー通り38番地にあるレンガとスタッコの19世紀のこの建物は、化学薬品に汚染され、長い間放置されていたもので、1993年から96年にかけて、建物(5,500㎡)が修復再生されました。

- 省エネルギーの立場から、下記の実現がうたわれました。
- 年間エネルギー使用量を改築前より50%カットする。
- 二酸化炭素放出量を30%カットする。
- 電気代の低減化によりテナントの負担を減らす。

これらの数値目標を、ソーラー、雨水の有効利用、地下水、屋上緑化、壁面緑化、日陰の積極的な利用、換気、植栽、建築資材の断熱化、公共交通機関の利用、等を有機的かつ積極的に再構築し、その効果をデータで公開し、説き伏せて行った、女性達のねばり強い働きかけが実を結び、保存再生を実現した、驚くべき先例となっています。

この施設には、デイケアセンターや、植栽のある中庭、その裏のアーティスト・スタジオ、カフェテリア、レストラン、会議室、オフィス、ショップ、自転車やベビーカーが並ぶ駐車場、屋上のソーラー設備などを備え、会議室では、世界中からの顧客を迎えたセミナーやワークショップが行われています。隣接する500㎡の敷地には、住宅供給局の基金によって13戸の住居ユニットも増築されました。

見学ツアー等の情報はドイツ語サイト

www.weberwirtschaft.de

をご覧ください。

(田中厚子+中野晶子)

保存技術と協働マネジメント術
—求道学舎の場合—

■求道学舎と求道会館、それぞれの保存の形

「求道学舎」は、大正15年に竣工した若者達が家主である僧侶と起居を共にする寮。RC造で設計は武田五一、施主は浄土真宗の僧侶である近角常観(ちかづみじょうかん)。隣接する大正4年竣工の求道会館と共に常観の信仰を語り伝える場であった。平成11年に学寮としての役目を終えたが、常観の孫であり建築家の近角真一夫妻は、東京都指定有形文化財として修復された会館の維持と近代建築である学舎の再活用を両立する道を探し当てたのだ。

■不動産の三鬼門を乗り越えて

最初は学舎の一部を取り壊し、分譲マンションを新築する案もあったという。しかし、バランスシートが折り合わず断念。これが、結果的には学舎全ての保存に繋がった。紆余曲折を経て、資金調達と適正価格を両立出来るとして選ばれたのが「スケルトン定借(つくば方式)」と呼ばれる事業方式だが、中古物件というのは同方式でも初めての例であった。

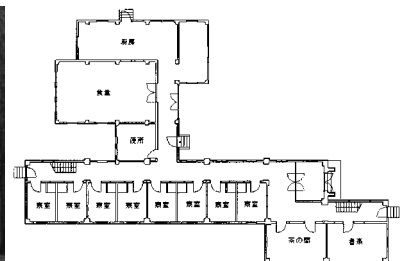
難航したのは居住者集め。近角氏の言われる不動産の三鬼門、「中古」「コーポラティブ」「定期借地権」と一般に馴染みのない条件が重なることがネックになり、居住者すなわち出資者が決まらない。近角夫妻が一番途方にくれたのは、このときだという。最終的には、某新聞の記事が契機となって、断らなければならないほど多数の応募があったそうだ。

■築80年、中性化したRC造の保存の研究

こうして10世帯の居住者が決まり事業が動き出すと、今度は技術の壁が立ち塞がった。なにしろ80年前の建物である。耐震評定、中性化したコンクリートの処理もしなければならぬ。しかし、築後80年を経過したコンクリートの建物をどうするかという研究は未だなく、現在、建築研究所のフィールドとして現場を提供しているそうだ。



コモンスペース付近の外観



求道学舎平面図

■保存再生コンソーシアムへの期待

ストック活用が必要な時代になって大いに期待されている。しかし、それを現実にする制度の整備は遅れている。学舎の再生でも、制度がない、あっても使えない制度に、近角夫妻は想像以上に大変な苦労をされている。

また、建物の保存再生には、多くの職能が必要であると感じた。資金計画、居住者の募集や面接、建築設計、維持管理、コーディネーター等、それぞれに専門家が必要であり、これらがコンソーシアム(事業の推進や資金需要に対応するため、銀行や企業等が形成する借款団や融資団)を組み協働してはじめて保存再生事業は成功するのだろう。耐震評定のあり方や融資制度、地主や各種の専門家同士を結ぶコーディネーターやネットワーク等、保存再生を支援する制度の拡充や人材の育成が望まれるのは勿論だ。

学舎再生における近角夫妻こそ、保存再生コンソーシアムのコーディネーターだったと言えよう。広報メンバーと共にかがった取材に熱心に対応頂き、とても感謝している。

(石川和代)

屋敷町の町並み保存と活用

－白壁アカデミアの活動－

尾関 利勝

■白壁・主税町・榎木町界隈の歴史

名古屋市の町並み保存地区に指定(昭和 61 年)されている東区白壁・主税(ちから)町・榎木(しゅもく)町一帯は、幕末までは尾張名古屋の城下東を固める、一宅地およそ 600 坪の中級武家屋敷町でした。朝日文左衛門(清水義範著・元禄御豊奉行の日記の主人公)が住んでいた町です。

明治維新後、武家と入れ替わって新興起業家がこの町に住み始めました。600 坪の敷地は住まいと商談や社交に適切だったようです。名古屋の産業近代化を先駆けた陶器貿易商、紙問屋、自動織機を発明した豊田佐吉とその一族、電力開発に奔走した福沢桃介はじめ、経済人たちが明治末から大正、昭和の初めにかけて、外観は洋風、内部は和風の和洋折衷・ハイカラ住宅を競って建てたのです。

ここには京都大学建築科を創設した武田五一先生設計の住宅が今も残り、一部がフランス料理店に活用され、ここで UIFA JAPON 総会後の懇親会が開催されました。皆様をご案内した一帯は、白壁とは裏腹の黒塀に見越しの緑と屋根が見え隠れする、庭と一体の屋敷の町並みです。

近代に住み手が替わったように、その後も料亭や企業厚生施設などに替わり始めていましたが、近年は相続を契機にマンション化する動きが強まっていました。

■白壁アカデミアの活動

白壁アカデミアは、市民グループが 5 年間の時限で篤志家のお屋敷をお借りして始めた「榎木館」の活動が契機となり誕生しました。地価の高い住宅地、相続が発生するたびにマンション化が進む中で、住民ではない外部の応援団がなにをしたら良いのか、その結論が、市民による市民のための学習塾だったのです。平成 10 年 9 月の発足以来、今日まで世話人の手作り多数の研究講座、公開講座、他の町並み保存地区との交流講座などを開催してきました。

その後、行政からのまちづくりの働きかけ、従来ルールを破る高層マンション計画などを契機に住民の方々による「白壁・主税町・榎木町の町並み保存地区の住環境を考える会」の活動が始まり、私たちも応援をしています。

今年、名古屋市が民間企業から寄贈を受け、移築復元した「文化の道・二葉館」は、福沢桃介を追って名古屋に住んだ日本初の女優と言われる川上貞奴の屋敷で、その運営ソフト事業を中心に、民間企業とコンソーシアムを組み、指定管理者を受け持つ事になりました。

■町並みを公共資産として守れる税制へ

経済性を伴いにくい住宅地の町並み保存の困難性を嫌と言うほど実感しています。住民の皆さんは、町並み保存の方向を観光化ではなく静かな来訪者を望んでいます。

今、町並みや文化財保存で望みたいことは保存される建物について、その期間中相続税の適用を猶予することです。



旧豊田佐助邸での勉強会

建物は個人資産でも町並みは公共的文化資産ですから、国の税制が文化を破壊するのではなく、遺す方向に働くべきだと思います。そうなることを期待しています。

(第 13 回 UIFA JAPON 総会講師 JIA 会員地域計画建築研究所)

民家の再生

－先駆者；中善寺紀子が成し遂げた再生の仕事－

■事務所と自宅は看板建築の保存と再生

こんなに精力的に日本の文化である「民家」を再生し続けていたのは何故なのか？ お訪ねした事務所の空間も、町並みの「再生」そのものであった。所沢という土地柄は戦災に遭うことなく、2 階建ての小規模店舗が並ぶ。その一角に店のファサードが全く違う 2 つの店舗をつなげて、その二棟の狭間にスカイライトを設け、前面を事務所に、後方をご自宅に再生されている。



2つの看板建築を事務所と自宅に再生
(水彩画：中善寺多加敏氏)

残念ながら、中善寺紀子の 30 年続いた「民家再生」の仕事は、突然、この 5 月に途絶えてしまった。異常を訴え、精密検査の後、診断されてからのあつと言う間の半年だったようだ。

中善寺登喜次氏の長女として、設計のなんたるかはその環境の中で生まれ、結婚後は、仕事の傍ら二人のお子さんを、融通むげに育ててこられた。

■ねばり強く、辛抱強く、執念深く、あきらめない

民家は、その場所でそのものを活かすべきとした彼女の手法は、昔ながらの大黒柱や、うねる梁を、装飾的にだけ使う表面的な民家再生ではなかった。現状の綿密な調査は、時に屋根裏を積年のホコリに挨拶しながら、ほっかぶりをし、軍手をはめ、厳重なマスク着用のもと、暗がりにはサーチライトを当てて、入念に行われた。

施主の現代生活に即した要望を聞き、建設当初の「来客」主体であった空間構成を、住み手にとっての快適で明るい空間に、時には玄関の位置さえ変えてしまう「再構築」である。ひらめきとアイデアの求められる仕事である。「よみがえる民家」：相模書房刊には、著者の関わった 6 軒の民家再生のドラマが、出会い、計画、契約、施工、完成後のやりとりなど、つぶさに記録(親譲りの記録魔)されている。

■中善寺紀子の作法－民家の「空間の連続性」－

- ・施主の予算を聞く(予算の範囲での提案を行う)。そして要望も
- ・敷地と家族のあり方を徹底して吟味、互いの熟成期間において、一つのプランだけを呈示する(中善寺登喜次の教え)
- ・採光や風通しのためには、柱・梁組も再考し、再生する(木構造に強く、大胆な判断を可能としていた)
- ・耐震と軽量化のために、景観について深く洞察しつつ、屋根の一部を瓦葺きから金属板葺きにすることも
- ・断熱を厳重にし、床暖房を奨励、今を生きるための方法を優先的に選択し、伝統工法にとらわれない
- ・視覚的には空間をつなげ、入念な設備を施す
- ・工務店との信頼関係を大切に、特命で見積もりを採る

全力を尽くして成し遂げてきた彼女の「民家再生」には絶大なサポーター＝夫＝多加敏氏の存在が大きい。スケッチや図面作成、家具デザイン、そして相談役。パートナーとの協働のエンドレスな関係は、彼女が民家再生に最もめり込んだ理由の一つである「空間の連続性」とどこか通じる物がある。たびたびライトの住宅を訪ねたのも、キーワードは、「エンドレスに空間が繋がる＝Continuity」なのだそうだ。時空をつなげて彼女と直接話しができたら、ご冥福を。(中野晶子)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町2-5-4

第2押田ビル ㈱生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2005年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

団地再生シンポジウムから

-「団地再生と建築家の役割」先行するEUに学ぶ-

老朽化した住宅団地をリニューアルし快適な生活環境に作り変えるプロジェクトが注目されているとして、10月3日すまいるホールでのシンポジウムは、考え方、技術力でも先行するEUのモデル事業から学ぶ、として開かれた。ドイツからのゲストパネリストは、H・シュトレープ氏。1947年生まれ、GRAS社長で、建築家、プランナー、コンサルタントとして45都市における縮退化対応政策への支援に従事している。紹介された、ドイツ・ライネフェルデの事例は、東西冷戦の終結時に疲弊していた住民コミュニティと住環境づくりに10年かけた都市再生である。再生の理念は、計画経済時代の偏った産業構造と居住地形成を転換して経済・社会の安定をはかり、地域潜在力に根ざした共同体資産をつくること。このライネフェルデの挑戦は、労働、居住、自然を一体的に展開し、経済活動を高め、環境価値を向上させ、エコロジーのクオリティ、持続性を高めようとした。住宅マーケットの予測から始まるプロジェクトの全容から学ぶべきものは、非常に多い。EU都市計画賞とA I UのR・マチュー賞に輝いたプロジェクトを見学を訪れたいものである。(渡辺喜代美)

会員おすすめの本 寺尾信子

『「環境建築」読本』

彰国社刊 ¥2000

「環境建築はもはや議論の段階ではない。実践し、闘い、成果を勝ち取らなければならない。」

2004年4月から始まったJIA環境建築連続セミナーの8回の講座が一冊の本となった。・・・今年2月、英国南極調査機関は地球崩壊のシナリオ改定を発表した。つい4年前に1000年先と予測したものを、なんと100年先に縮めてきたのである・・・という「序」に始まり、専門的な講座を電車の中でも読めるサイズと言葉で著した。6ヶ月という短期間で単行本化した「行動」に、事態の深刻さを伝えようとする編集チームの熱意を感じていただければ幸いである。私はJIA日本建築家協会環境行動委員会委員として編集幹事を担当。



ライト建築アーカイブズ日本設立記念イベント報告

代表理事 森晃一

2005年9月24日に「ライト建築アーカイブズ日本」設立を記念したスペシャルイベントが開催されました。雨にもかかわらず、UIFA JAPONの方々をはじめ多くの皆様においでいただき、充実したすばらしい一日となりました。

キッズイベントに参加した小学生たちは、明日館の積木制作に集中して取り組み、フランク・ロイド・ライトが設計した明日館、そして遠藤新が設計した明日館講堂に興味と親しみを示してくれました。

黒川紀章氏、香山壽夫氏、南迫哲也氏、アレックス・カー氏、マルゴ・スタイブ氏の5名のパネリストによるパネルディスカッション「ライトと日本の出会いの意義」では、それぞれライトへの思いが凝縮したメッセージを、満席の参加者に投げかけてくれました。そして、ライトを知ることが将来の日本の形成に重要であるという共通の思いが伝えられました。米国フランク・ロイド・ライト財団を代表して来日したスタイブ氏からは、ライト建築アーカイブズ日本への全面的な支援を表明いただきました。また長時間にわたりご出席くださった豊島区長 高野之夫氏、夕刻に駆け付けられた千葉県知事 堂本暁子氏からは、ライト建築アーカイブズ日本への期待をお話いただきました。

UIFA JAPON会長、そしてライト建築アーカイブズ日本理事である小川信子氏には、5名のパネリストのほか後援団体などVIPの皆様にも、ライト建築アーカイブズ日本の活動を紹介し、今後の協力をお願いしていただきました。

今後は、フランク・ロイド・ライト財団との協力関係をより強固にしながら活動を展開して参ります。フランク・ロイド・ライトの日本での伝統を伝えていく活動に興味のある方は、ぜひご連絡ください。今後とも皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(連絡先Eメール: waaj@apost.plala.or.jp)



役員会報告

第6回 9月20日

第36回海外交流の会「水の都市・ベルリン」の報告。災害復興見守りチームの「中越における民家再発見プログラム」への協力要請があった。ライト建築アーカイブズを後援し、イベントへの参加について検討。

第7回 10月18日

グループハウス「ほっと館」の見学会について検討。見守りチームの「仮設・日本村誕生をめぐる」の開催に際し、仮設市街地研究会との連携を承諾。IAWAのアドバイザーとなっている副会長・松川さんのバージニア工科大学で開催されるアドバイザー会議への短期出張を了承。

編集後記

保存・再生技術は災害復興にも必要→次号は災害特集です(石川) 物あふれの世の中、今は消え物の時代ではと感じている(須永) アメリカにおけるライト建築保存活動の活発さを実感し、羨ましく思いました(田中) 吹きすさぶ嵐を背景に、八ヶ岳音楽堂(設計:吉村順三)が鳴る、ピアノとチェロも鳴る。美しい建物が根を下ろし成育するには、水をやり続けなければ(中野) UIFAの国際会議のテーマにそって世間をみると課題山積。05年最終65号は保存と再生。来春66号にては災害と向き合う。寄稿期待(渡辺) 異業種でコンソーシアムを組み保存再生を力強く進めてきている内外事例、磨きのかかったプロの育成が望まれる(井出)